

日本学論叢 VII

北京日本学研究中心

外语教学与研究出版社



日本学論叢 VII



北京日本学研究センター編

(京)新登字 155 号

北京日本学研究センター

主 任 嚴安生
主任教授 竹内実
副 主 任 徐一平

編集委員会

中国側：徐一平 譙燕 宋金文 吳咏梅

日本側：浅野純一 清水展 篠崎摂子 川嶋将生 秋山元秀

日本学论丛Ⅵ

北京日本学研究中心 編

* * *

外语教学与研究出版社出版发行

(北京西三环北路 19 号)

北京外国语大学印刷厂印刷

开本 787×1092 1/16 19 印张 437 千字

1995 年 9 月第 1 版 1995 年 9 月第 1 次印刷

印数：1—1000 册

* * *

ISBN 7-5600-1052-0

H·572

定价：25.00 元

ま え が き

本論文集には、第7回修士学位論文審査通過論文を4編、研修コース第9期研修生修了小論文7編、第6回日本学中日シンポジウム発表論文8編、計19編を収める。

第7回修士学位論文審査は1993年12月17日～18日の論文答弁を経て、1994年3月31日に正式に学位が授与されている。掲載にあたっては、訪日研修時の指導教官に再度修正、校閲をお願いした。各指導教官のご助力と学生本人の勤勉により、ご覧の通り、第一線レベルの論文をそろえることができた。お忙しいなか校閲等ご快諾くださった諸先生に編集委員会より改めて感謝申し上げる。

研修コース生のなかには、これまでに論文作成の経験を十分に積んでいない者も少なくない。そうでなくとも短い研修期間の、しかも密に組まかた授業のあいまに、テーマの選定、資料の収集、考察、論文執筆を行うことは容易なことではない。しかし、彼らは見事にそれを成し遂げた。

シンポジウム発表論文は、従来「シンポジウム論文集」として公表してきたものを今回試験的に停刊し、特に学問的価値ありと認められたもののみを本論文集または「日本学研究」に掲載することとした。発表即掲載では論文集としての定レベルが保てないと考えたため、中国での学会の慣習にあわないことはもとより承知の上だが、これにより、従来の「シンポジウム論文集」より全体としてレベルの高いものに仕上がったのではないかと思う。シンポジウム運営側及び発表者各位にもこの点をご理解いただければ幸いである。

この論文集がセンターの現時点での学問的レベルを忠実に表し、センターのさらなる発展の礎となることを心より期待する。

1994年12月28日 北京日本学センター
編集委員会

「日本學論叢」第Ⅶ号掲載論文

大學院 7 期生

色彩語の語構成についての中日対照研究	苏 紅 (1)
離魂文学考	周以量 (17)
√日本の地域開発における環境問題	杨 琰 (45)
市川房枝試論	卞 慧 (71)

シンポ投稿

トノ格の名詞と名詞との組み合わせ	彭広陸 (95)
√夏目漱石の中国人認識	黄文明 (111)
葛藤の中の女「明晴」における夏目漱石の女性認識	郭 偉 (121)
本世紀 20 年代中日文学間交流の交往 (中国語)	徐静波 (143)
√日本における中流意識の正体について	孔繁志 (153)
√日本経済における企業家活動の展開	伍国春 (175)
√近代日本の経済発展と社会問題	周啓乾 (193)
内村鑑三のキリスト教受容	申勝花 (205)

研修コース9期生修了小論文

大学の初級日本語の教育に合う教授法の研究—直接…	冯景朝 (227)
「先」を構成要素に持つ語	嚴紅花 (237)
中国語に「給」に対応する日本語の表現	赵偉華 (247)
「仮名」の語源をめぐって	胡 林 (257)
√日本的経営の特色と中国企業	張海燕 (269)
√日本の子供の行事と遊びについて	包淑蘭 (281)
日本古代伝承における蛇の善と悪	姜艶斐 (289)

色彩語の語構成についての中日対照研究

苏 紅

はじめに

語は構成上、単純語と合成語に大きく分類される。単純語は最小の自立形式である。合成語は2つ以上のものからなるもので、これはさらに、派生語と複合語に分類される。派生語は自立形式と非自立形式からなるもの、複合語は自立形式と自立形式からなるものである。そうした語構成を、中国語ならびに日本語の色彩語について分類し、それぞれの特色について考察したいと思う。ただし、本稿では、色彩語を用いた語の構成（たとえば、「白雲」「黒豆」「赤旗」など）というよりも、特定の色を表す色彩語（「白」「黒い」「赤らむ」「水色」など）の語構成を扱うこととしたい。

色彩語の語構成に関しての従来論及は、中国語・日本語ともに厳密なものはいくつかない。その中で、大河内康憲（1981）は中国語の色彩語に関する論考としては比較的まとまったものであるが、語構成の代表的なものを挙げたにとどまり、不十分な点が認められる。また、日本語の色彩語に関するものでは「色の手帖」（1986）に色名の由来から整理したものが見えるものの、やはり言語学的手続きによって分析されたものはないようである。従って、中国語と日本語の色彩語の語構成をそれぞれ分析・整理しておく必要があると思われる。そうした個別言語における分析を踏まえて、両言語の語構成を比較対照することは、中国語と日本語の間に、中国語から借用された字音語（漢語）が介在している点からも興味深い問題である。日本語の色彩語を語種の観点から考察する上でわかりやすいように、その用例に☆印で字音語（漢語）、※印で外来語、*印で混種語を指すことで明示した（すなわち、印のないものは和語である）。

分類に関しては次のような表示法を用いた。

ア 次のような略号を用いる。

（原則として、大文字を自立形式に、小文字を非自立形式に用いる）

C…色を表す語 C i…色を表す語の異形態（例：白^{しろ}）

c…色を表す語の字音読み（例：黒^{くろ}）

B…Cの意味を限定する自立形式の成分

b…cの意味を限定する非自立形式の成分

N…名詞的成分 V…動詞的成分

A…形容詞的成分

D…副詞的成分 n…名詞をつくる接尾語 v…動詞をつくる接尾語

a…形容詞をつくる接尾語 d…副詞をつくる接尾語

e…形容動詞語幹をつくる接尾語

α…接頭語、ただし形容詞語幹に相当するもの（例：薄^{うす}）

β…接頭語、ただし形容詞語幹に相当しないもの（例：真^ま）

K…字音語（上記Cを除く）の自立形式

k…字音語（上記cを除く）の非自立形式

g…外来語（色彩語を除く）の非自立形式

色s…音で「しょく」とよむ非自立形式

（+色）…「色^{いろ}」を付けて用いることがある

（-色）…「色^{いろ}」を付けずに用いることがある

イ（ ）[]は修飾関係を表したもので、（ ）内は修飾語であることを示す。また、その修飾語、またはそれによつて修飾される語（被修飾語）の中に、更に修飾関係がある場合、その修飾語となるものを[]内に示す。ただし、（ ）によつて修飾される構成成分、すなわち被修飾語に、[]が含まれる場合には、その被修飾語を{ }でくくる。たとえば、中国語の「乳白色（乳のような白色）」は「乳」（N）が「白色」を限定修飾し、更に被修飾語「白色」は「白」[C]が「色」を限定修飾していることから、「[C]色」を{ }でくくり、「（N）{ [C]色 }」のように表す。そのほか、「焦茶色」は「焦茶」（VC）が「色」を修飾限定し、更に「焦茶」は「焦」[V]が「茶」Cを修飾していることから、「（[V]C）色」というように表す。

また、{ }は、あるまとまりを示す場合にも用いる。たとえば、「赤々と」のように、「赤」の疊語形（[C][C]）に副詞をつくる接尾語「と」dが接する場合、「[C][C]」を{ }でくくり「{ [C][C] }-d」のように記す。

ウ 並立関係（「…と…と」）である場合は、括弧を並列させて示す。例えば、中国語「黑白」、日本語「あかあか」などは「[C][C]」のように表す。また、[]のない「C」は、日本語「黄緑」のように、二つの色の中間色を表す。

エ 派生語の接頭語・接尾語の場合は「-」で示す。

1 中国語における色彩語の語構成

まず、単音節Cが色を表すものとして次の語がある。

I 単純語 C 白 黒 紅 緑 黄 藍 紫

上のような基礎色彩語以外に、単音節の語に「绛（濃赤色）」の例がある（注1）。また、「粉（ピンク色）」は現在では一字だけでは十分にその色相を表すことができず、「粉紅」という語形で表される。

次に合成語について述べる。複合語は、次のように分類される。大河内（1981）では、色彩語の語構成を7つに分類している。この分類は代表的な語構成を示したものとして見るべき点も多いが、全体的に見て十分に整理が行き届いているとは言えない。たとえば、単純語（上記のIに相当する）、そして下記のⅡ2・6・7・8、Ⅲ2③ウ、Ⅲ2③ア（「鳥」「碧」なども1つの分類としているが、本稿では基礎色彩語を中心としているため、この他は扱わないこととする）などをあげているにとどまっている。従つて、合成語に関して、更に詳しく分類することが必要であると思われる。以下、派生語と複合語に分けてまとめること

とする。

I 派生語

1 { [C] [C] } -a

まず、疊語形式の語がある。

白白(的) 黒黒的 紅紅的 緑緑的 黄黄的 藍藍的 青青的 紫紫的

「白白」だけは「的」が付かなくても用いられる。ただし、「的」が付かない場合は、色を表さず、〈無駄だ〉〈空しい〉の意を表す。

2 (C) { [b] [b] } -a

呂叔湘著『現代漢語八百詞』(1980)では、付録の「形容詞生動形式表」にこの形式がかなり詳しく分類されている。それに従って、筆者なりにまとめてみることにする。ちなみに、日本語にはこの造語法はない。

C b bでは、Cとb bとの結び付きは制限的であり、方言によって、また人によって違いが見られることもある。文章をいきいきと表現するために、時には表現しようする人が自ら造語することもある。以下、その例の一部をあげる。

白皚皚的 黒洞洞的 紅澄澄的 緑葱葱的 黄蜡蜡的 藍晶晶的

青葱葱的 紫乌乌的 灰乎乎的

基本的な色彩語のうち、「茶」「橙」だけがこの形式の語を持たない。

bbは、Cに結び付いてCの意味やニュアンスの違いを表す。たとえば「黒压压的」は黒山の人だかりの様子をいきいきと表すものであり、「黒油油的」は、髪の毛などの、黒くてつやのあるさま、「紅光光的」は顔などの、つやのある赤色、「紅通通的」は顔、太陽、夕焼け、火などの、真っ赤なさまを表している。また、章銀泉編著『色彩描写詞語例釈』(1983)などの用例集には見出しがないが、「黒通通的」「緑光光的」などの言い方も可能であって、それぞれ〈真っ黒〉〈つやのある緑色〉の意を表す。「乎乎」のようにほとんど意味を持たないb bによる形容詞も認められるが、こうしたb bが何らかの意味を持ついるものがかなり多くを占めている。

次に結合の制限性の観点から述べれば、b bが一定のCとしか結合しないものがある。たとえば、「一鸦鸦的」は「鸦」がカラスの、それぞれ形容詞の全体の中でそれぞれ「黒」「白」としか結合しないのである。このほか、「紅赤赤的」「緑葱葱的」なども形容詞全体の中で結合がCとb bの結合が制限的である。このほか、色彩語の形容詞だけに限って言えば、「一压压的」「黒」、「一巴巴的」は「黄」、「一茸茸的」は「緑」、「一湛湛的」は「藍」とだけ結合するなどの例が見える。

これに対して、同一のb bが、多くのCと結び付くことのできるものがある。

白乎乎的 黒乎乎的 紅乎乎的 黄乎乎的 灰乎乎的

これらのb bは、いずれも意味が具体性に乏しいため、結合が非制限的であって、そのため多くのCと結び付くのであろう。

更に、同じCに結び付く同音のb bが、書き方は異なるが、同じ意味を表すものがある。たとえば、「黄糊糊的」「黄胡胡的」「黄乎乎的」などは、「糊」「胡」「乎」は同じ[hu]であって、書き手によってそれらの内の一つが選ばれる。「黒乎乎的」「黒糊糊的」「黒忽忽的」などもこの類である。

このC b bに関して、大河内(1981)では「黒」に著しく多い」と述べているが、章銀泉(1983)によると、このC b b構造の見出し語が「黒」24語、「紅」21語、「白」15語、「緑」11語、「藍」11語であって、「著しい」というよりも比較的多いという程度であって、Cに「紅」「白」を持つ語も少なくない。また、「黒」に多いという理由を「付随する感情価値が暗さでは多様だということであろう」とも述べられているが、色彩そのものに感情やイメージが伴っていることが多く、客観的描写においてもさまざまな言い方(語)が必要であるからではなかろうか。

3 (C) {b1 b2 b3}

このCb1b2b3の構造は方言に多く(注2)、ここでは、一応、北京の口語を代表としてあげてみる。

白了呱呱 白不吡列 白不拉叽 黒不溜秋 黒古隆冬 紅不棱登

灰不溜丢=灰不溜秋 緑不喇唧 灰拉巴叽

これらのb1b2b3は、軽蔑や悪意を込めるというニュアンスを付加する場合が多い。また、「了呱呱」「不喇唧」などは単独で使うことはなく非制限的であって、多くの色彩語に付くことができる。この形式によく似ていて、同じように悪意を込めるというニュアンスを表すものに「灰不几几」というCb1b2b2構造のものがある。これは「灰不几」というCb1b2構造と同じ意味である。

4 (B1B2b) C 鳥漆巴黒

4' (B1B2B3) C 鳥漆麻黒 鳥漆沫黒 鳥漆墨黒

これらはいずれも〈真っ黒である、いい加減なさま〉の意を表す。黒を表す「鳥」

「墨」などの語を付し、口調をよくして「漆黒」を強調する働きをするものと思われる。

5 (C) 色 白色 黒色 紅色 緑色 黄色 藍色 青色 紫色

6 (N) 色

「Nのような色」の意である。Nが1音節のものには次のような語がある。

緋色 金色 栗色 菜色 粉色 玉色 妃色 米色 水色 茶色 灰色

「茶色」「灰色」は現在では、基本的な色彩名を表すため、「茶」「灰」という事物を表しているという意識が希薄である。これとよく似たものに「藍色」がある。これももとは植物名の藍から取った染料の色で表されたものである。

上記の多くは特定の色を持たない事物をNとした語もある。たとえば、Nが「玉」「粉」「菜」などの場合である。これらは、玉には様々な色があるが、「玉色」は薄青色を表し、粉、菜(野菜)にもいろいろな色があるが、「粉色」薄赤色、「菜色」は緑色を表しているのである。また、「妃色」は美しい女性の肌の色のことで、薄赤色を指し、「米色」は栗の色で、すなわち淡黄色を表す。ちなみに、「水色」は水のような透明な色を表すもので、日本語における〈薄い青色〉の意と異なる。また、Nが2音節のものに「玳瑁色」「翡翠色」「高粱色」「珈琲色」「藕荷色」「珊瑚色」「楊妃色」などがある。「楊妃色」の「楊妃」は楊家紅という牡丹の花の別名で、その薄紅色を表す。Nが3音節のものも「紫羅蘭色」がある。ころらはいずれも「色」を伴って色彩語を表す。

7 ([N1] N2) 色

豹皮色 蜂蜜色 古銅色 金橘色 駝絨色 柳条色 象牙色 岩石色

「N1のN2のような色」の意である。

8 (N) { [C] 色 }

乳白色 墨黒色 桃紅色 草綠色 橙黄色 雪青色 蛋青色 天藍色 鉛灰色

これは「NのようなC色」の意である。具体的なものを例示して、その色の感じを限定的に明示したものである。「雪青色」は浅紫、「蛋青色」は卵の白味のような色を表す。これらは「色」を伴って用いられるのが普通である。それは、色彩語の多くが3音節であるため、1音節のNに「C色」の形式が付くのであろう。

9 C N 色

「Cの色を帯びているNのような色」という意味関係を構成するものであるが、意味上「Cの色を帯びたNの色」というように理解できるものもある。

([C] N) 色 白蜡色 黒醬色 紅栗色 青蓮色 紫茄子色

これらは、Nの事物の色がC色と同じである場合が多い。具体的にCの色をNで例示することで、その色を明確にするのである。

一方、事物Nにはいろいろな色があるため、その前に色彩語Cを付けたものもある。

([C] N) または (C) { [N] 色 }

白玉色 緑玉色 藍玉色 青玉色 紅銅色 黄銅色 紫銅色

これらは必ず「色」を付けて用いられる。このような構成は、Cが色を、Nが具体的な色調を示すものと言える。

「N+C+色」と「C+N+色」とで、NとCが位置を逆転する例がある。

乳白色↔白乳色 栗紅色↔紅栗色 橙黄色↔黄橙色 玉綠色↔緑玉色

靛藍色↔藍靛色 土灰色↔灰土色

いずれも意味は変わらないが、「N+C+色」の方が一般的によく用いられる。

■ 複合語

1 ([N1] N2) C 魚肚白 鉄锈紅 葱心緑 柳叶黄 鴨蛋青 宝石藍

これは「N1のN2のようなC(色)」の意である。また「公安藍」「国防緑」「海軍藍」「学生藍」などは、「Nに従事している人(Nである人)が着る物のC」の意である。これらは「色」を付けないのが普通である。それは、色彩語の多くが3音節語であるため、その影響で2音節のNにCが付く形式では「色」が付かなくても用いられる。

2 B C

このBには名詞(N)、動詞(V)、形容詞(A)、副詞(D)がある。色彩語に前接する、こうした修飾成分の品詞性による分類は、張清常著「漢語的顏色詞(大綱)」(1991)などに既に見えるが、本稿では、更に副詞をも分類し、またBが形容詞(A)の場合についても「ア Aが明度(深淺明暗)の類」「イ Aが純大鮮嫩慘などの類」の2類の区別に加えて、新たに「Aが色を表す類」である場合をも加えた。

① (N) C [Nが1音節] 雪白 花白 漆黒 鳥黒 血紅 柳緑 金黃

碧青 碧藍 漆紫 銀灰

「雪白」「漆黒」「鳥黒」「血紅」「柳緑」などのように、「NのようなC」という意味関係を構成することが多い。しかし、中には「花白」のように〈花〉と関係なく、白と黒の混じった色を表すものがあり、また、「粉紅」のように、粉のような赤色の意ではなく

「粉」自体が化粧用ファンデーションのピンク色を表していて、「紅」は単に添えられたというものもある。Nが特定のCとしか結合しない制限的なものに、「雪白」「血紅」「酡紅」「赫巖」「羞紅」「素白」などある一方、Nが非制限的で、多くのCと結び付くこともある。たとえば、「油黒」「油黄」などの「油」、「水紅」「水黄」「水緑」「水藍」などの「水」がそれである。

(N) C [Nが2字で1語]

珍珠白 女兒紅 秋香綠 鸚歌綠 薜荔青 孔雀藍 葡萄紫

② (V) C

枯黒 窘紅 漲紅 澄黄 澄藍 湛藍

ある動作・作用 (V) に伴って、もしくはある動作・作用 (V) の結果、C (色) であるさまの意となる。

③ (A) C

ア Aが明度 (深淺明暗) の類

昏白 昏黒 黝黒 幽黒 深紅 淺紅 淡紅 暗紅 昏紅 深綠 淺綠
濃綠 淡綠 暗綠 深黄 淺黄 淡黄 明黄 暗黄 昏黄 淡青 深藍
淺藍 淡藍 深紫 淺紫 淡紫 暗紫 深灰 淺灰 淡灰 暗灰

「色」を付けて用いるのが普通であるが、付けなくても用いることができる。また、これからは、明度を表す「深」「淺」「濃」「淡」「明」「暗」の語が接頭語のように結合している。大河内 (1981) では「日本語のように「濃」はない」と述べているが、と中国語に「濃綠」の語は存在する。

イ Aが純大鮮嫩慘などの類

純白 純青 大紅 大綠 鮮紅 鮮綠 嫩紅 嫩綠 慘白 慘紅
殷紅 新綠 干黄 姹紫

イは、上記ア以外の色相 (明度) の限定的な様相を表したものである。Aが非制限的で、多くのCと結び付くものに、「慘紅」「慘白」「慘綠」「慘灰」などの「慘」がある。

ウ Aが色を表す類

苍白 黒紅 紫紅 朱紅 藍綠 灰黄 白藍 玄青 绛紫 青灰

ウは「AがかつたC (色)」「Aみを帯びたC (色)」というよりも、AとCとが混合した色を表す。文章語では「色」を付けるのが普通であるが、口語では付けないことが多い。

④ (D) C 煞白 煞黄 煞青 通紅

Dが非制限的で、多くのCと結び付くものもある。「煞黄」「煞白」「煞青」などの「煞」などが見える。

こうした、BC (NC、AC、DC) の中には、C b bと対応するものがある。

油黒↔黒油油的 油綠↔緑油油的 澄紅↔紅澄澄的 澄黄↔黄澄澄的
皚白↔白皚皚的 苍白↔白苍苍的 花白↔白花花的 淨白↔白淨淨的
通紅↔紅通通的 殷紅↔紅殷殷的 艳紅↔紅艳艳的 葱綠↔緑葱葱的
莹綠↔緑莹莹的 蜡黄↔黄蜡蜡的 湛藍↔藍湛湛的

これらのB (b) は本来の意味が希薄になって接辞のように機能し、BCの場合は接頭語のように、C b bの場合は接尾語のように用いられるため、上記のような対応を示すのである

(朱徳熙〔1980〕参照)。

両者とも同じような意味を表すが、ニュアンスが少し異なっている。BCには「浄白」「皚白」「殷紅」「澄紅」「艶紅」「澄黄」「莹緑」「油緑」のように、口語ではあまり用いられないものが多く含まれているのに対して、C b bは型にはまらない、その場に最もふさわしい生き生きとした表現となる。また、大河内(1981)では「黝黒」「烏黒」「緋紅」「通紅」「殷紅」「朱紅」などの違いに関して、「色相のちがいというより、感情価値のちがいを反映するものが多い」と述べられているが、「緋紅」は鮮やかな赤色、「通紅」は真っ赤、「殷紅」は黒みがかかった赤色、「朱紅」はつやのある鮮やかな赤色を表すものであって、それぞれ少し色調が異なる。また、感情価値という用語はすこしわかりにくい概念で、確かに「緋」には〈可愛らしい〉という情感がこめられて使われるようであるが、それらの違いを、どのような表現対象に対して用いるかという使用制限に求めた方がよいように思われる。たとえば、桜の花には「緋紅」しか用いず、血には「殷紅」しか用いない。顔については「緋紅」「通紅」がもちいられるが、「殷紅」は用いられない。ドアや簾簞には「朱紅」しか用いない。また、「黝黒」と「烏黒」はいずれも黒黒とした色を表しているが、ただ、雲や煙には「黝黒」は用いられないという使用制限がみられる。それらは感情価値という主観的な基準によるのではなく、言語表現の慣習に起因して使用に制限が見られるように思われる。

3 [C][C] 黒白 紅白 黄白

これらは2つの色彩語が並立関係にあるもので、上記2③の「ウ Aが色を表す類」の混合格という意味関係を構成するものとは異なる。

4 C B

CBの形式は少ない。Bが形容詞の場合と名詞の場合に下位分類できる。

[C][A] 紅赤

「紅赤」は、ACの「赤紅」とな。てや意味は変わらない(紅赤↔赤紅)。「紅赤」は現代の口語ではあまり用いず、C b bの「紅赤赤的」を用いるのが普通である。

C N 藍翠

CNの場合もCAの場合と同じくNCとな。ても意味の変わらないものがある(藍翠↔翠藍)。ただし「藍翠」「翠藍」は現代口語ではあま用いられないが、「翠藍」は老人語として用いられることがある。

5 B C B C

二音節の疊語では、下記の4種類が見える。

【(A) C】[(A) C] 慘白慘白 幽黒幽黒 鮮紅鮮紅 嫩緑嫩緑 湛藍湛藍

【(V) C】[(V) C] 澄黄澄黄 焦黄焦黄

【(N) C】[(N) C] 雪白雪白 漆黒漆黒 血紅血紅 碧緑碧緑 金黄金黄
碧藍碧藍

【(D) C】[(D) C] 煞白煞白 通紅通紅

これらはBC(AC・NC・VC・DC)の語を、それぞれより生き生きとした表現としたり強調したりする形式である。

2 日本語の語構成

日本語の語構成を考える場合、語種によって扱いが異なる。特に、漢語は原則として漢字一字が造語成分である。従って、和語・外来語の場合には語に基づいて分類するのと違って、漢字一字を単位として扱うことになる。そのため、和語・外来語の場合と漢語の場合とでは分類の基準が少しずれるが、できるだけ同じ基準で扱って考えていきたいと思う。

I 単純語 C 白 黒 赤 緑 青 紫 黄 藍 ☆茶 ☆紺

※ピンク ※オレンジ ※ベージュ

まず、これらの単純語は「色」を付けても用いられるが、「色」を付けずにそれだけで色を表す語であり、基本的な色彩語という性格を持っている。特に「白」「黒」「赤」「青」は多く合成語を構成する要素であり、古代日本語の基本的な色名と言われている(佐竹昭広〔1950〕)。これに対して、「黄」「藍」は「色」を付けるのが普通である。特に「黄色」は形容詞の語幹となって「黄色い」という形容詞を構成する。漢語の色彩語である「茶」「紺」は「色」を付けても用いられるが、単字でも用いられるのは、それらが事物を示すというのではなく、その色を直接表すからであろう。このことは、基本的な色彩語ではないが、「^{れない}紅」についても言えることである。「^{れない}紅」が「色」を付けなくても〈鮮やかな赤色〉という色相を表すのは〈ベニバナ〉という事物を示すことが現代語ではないからであろう。「ピンク」「オレンジ」「ベージュ」が「色」を付けずに用いられるのは、同じ色相を表す「桃色」「だいたい色」「駱駝色」などよりも、語感がよく日常的に用いられるからであろう。

これに対して、次の外来語は「色」が付くことはない。

※ホワイト ※ブラック ※レッド ※グリーン ※イエロー ※ブルー

※グレー ※ブラウン

これらは、同じ色相を表す語に、別に和語の「白」「黒」「赤」「緑」「青」「灰色」や漢語の「茶」という、よく用いられる語がある。ただし、互いの色の概念は少しずれていると言われている(注3)。また、造語成分として「ホワイトソース」「ブラックリスト」「グリーンベルト」「ブルーリボン」などのように複合語を構成する場合が多く、外来語として色を表明することが明らかであるため、わざわざ「色」を付ける必要がないとも考えられる。これらのうち「ブルー」は英語の影響を受け、形容動詞の語幹として「ブルーな日々〈憂うつな毎日〉」のように用いられることがある。このような活用語尾「な」が接する場合は、色そのものを表すのではなく、感情を表す意味に転じている。これに対して、「ブルーの宝石」のように「の」が接する場合は、色彩名を表す名詞となるようである(注4)。

II 派生語

日本語の派生形式には、大きく分けて語を重ねる畳語形式(下記1~3)と、ある意味や文法的機能を表す成分を付加する付加形式(下記4~25)とが見える。

1 { [C] [C] } -d 黒黒と 赤赤と 青青と

2 { [Ci] [Ci] } -d 白々(しらじら)と

3 { [Ci][Ci] } -a 白々しい

疊語形の派生語は、「と」をつけて副詞となるほか、「する」を付けて動詞としても用いられる。これらはそれぞれの名詞形が重なったのではなく、「広々」「寒々」などと同じく形容詞語幹の「白」「黒」「赤」「青」が重なった語形である。従って、これ以外に色彩語の疊語形は見えない。ただし「白」は異形態「しら」の形による。この4語に疊語形式が限られているのはこれらが基本的な色彩語であるからであろう。

4 (g) 色 *カーキ色

「カーキ」は〈土ぼこり〉の意のヒンディー語であるが、非自立形式であって、「カーキ色」は派生語である。

5 (α) C

深緑 浅緑 浅黄 浅紫 薄紅 薄緑 薄藍 薄茶 薄鼠 若緑

6 (β) C 真緑 真っ白 真っ黒

7 (β) Ci 真っ赤 真っ青

8 (k) c ☆真紅

6・7・8は「色」を付けて用いることはない。深淺明暗の意味の接頭語の付いた5の語も「色」を付けないことが多い。接頭語「ま(真)」に関しては、「真っ白」「真っ黒」のように促音を介したものがある。また「赤」「青」に接する場合は、その異形態「か」「さお」と結び付く。これらの接頭語「真っ」が付いた派生語はいずれも「色」を付けて用いることはない。また、形容動詞の語幹として用いられることでも共通している。

真っ白な花 真っ黒な鳥 真っ赤な太陽 真っ青な顔

単純語ではないが、「真っ」が「黄色」「茶色」に接した語も形容動詞の語幹として機能する。

真っ黄色 (「まっ黄色な帽子」) *真っ茶色 (「まっ茶色な革靴」)

9 (k) { [c] 色 s }

☆乳白色 ☆暗黒色 ☆暗紅色 ☆暗緑色 ☆淡紅色 ☆淡黄色

「乳白色」は〈乳のような白色〉の意であり、それ以外は、kが淡い、暗いの意を表すものである。

10 (K) k ☆胭脂

〈燕の国の原産の紅色の化粧料の一種〉の意であることから、「胭」を「燕」と同じに扱って派生語とした。「色」を付けても用いられる。

11 (k) C ☆濃紺

これは「色」を付けて用いることはない。

12 [B (c)] ☆群青

13 [C (c)] ☆紺青

12の「群」、13の「紺」は単独で用いられる自立形式であるから、「群青」「紺青」を派生語とした。これらは「色」を付けても用いられる。

14 (c1) { [c2] 色 } ☆赤褐色

「c1がかったc2色」の意を表している。「赤」は非自立形式であるため、派生語である。

次に、動詞・形容詞・形容動詞の派生形について。

15 C-v 黒む 赤む 白ばむ 黒ばむ 赤ばむ 黄ばむ 青ばむ 白すぎる 黒
すぎる 赤すぎる 青すぎる 赤める 赤らむ 黒ずむ

16 Ci-v 白む 白ける

17 { (C) 色 } -v 黄色すぎる 灰色すぎる

16のように「白む」「白ける」は異形態「しら」に付く。「白」「黒」「赤」が造語能力が高く、「黄」がやや低い。接尾語「すぎる」は、形容詞語幹で「白」「黒」「赤」「青」の場合は直接付くが、そのほかの色彩語の場合には、「色」を介して付く。

黄色すぎる 灰色すぎる *茶色すぎる *紺色すぎる *ピンク色すぎる

18 C-a 白い 黒い 赤い 青い

白っぽい 黒っぽい 赤っぽい 青っぽい 緑っぽい 紫っぽい

19 { (C) 色 } -a 黄色い 黄色っぽい 藍色っぽい 灰色っぽい

*茶色っぽい *紺色っぽい *ピンク色っぽい

20 (α) {C-a} 薄白い 薄黒い 浅黒い

21 (β) {C-a} 真っ白い 真っ黒い なま白い ほの白い どん黒い

まず形容詞接尾語「い」がついて「白い」「黒い」などとなったものは、単純語がそのまま形容詞語幹となったものであるが、黄では「色」が付いた「黄色」が語幹となる。これは色名の「黄」が1モーラであるため形容詞語幹としてこれを避け、3モーラ「黄色」を語幹とすると思われる。1モーラ形容詞語幹は、日本語には非常に少なく「無一い」「良一い」「濃一い」「酸一い」(「酸い」は普通「酸っぽい」と言う)ぐらいである。これに対して、「きたな一い」「うるさ一い」「おもた一い」など3モーラ語幹のものが多い。そうした類推がいて「黄色い」という語形になるのであろう(注五)。「茶色い」という言い方も俗語的に用いられるようであるが、それは「茶」が黄と同じ1モーラ語であるからであろう。たとえば「茶色い服がよく似合う」(もちろん、普通には「茶色の服」と言う)。接尾語「っぽい」は、ほとんどの色彩語につく。

白っぽい 黒っぽい 赤っぽい 青っぽい 緑っぽい 紫っぽい

上記のような単純語には直接付く。これに対して、「黄」「藍」は単純語でも用いられるが、普通には「黄色」「藍色」という語形を用いることが多いように、これらには「黄色っぽい」「藍色っぽい」のように「色」が付いた形に接する。このほか「色」を介した色彩語にはほとんど付くことができるようである。

灰色っぽい *茶色っぽい *紺色っぽい

ただし、外来語の場合は、「ピンク色っぽい」「オレンジ色っぽい」「ベージュ色っぽい」とともに「ピンクっぽい」「オレンジっぽい」「ベージュっぽい」などと俗に言うこともあるように思われる。従って、「白」「黒」「赤」などの単純語に準じた語構成を持つ場合も認められる。α・βの付く形式は下記25の例を含め、いずれも白と黒に限られていることは注目される。

形容動詞となるものはまれで、接尾語「やか」の付いた例が見えるだけである。

22 C-e 青やか

ただし、現代語ではこの語はあまり用いないようである。

最後に名詞の派生形について述べる。

23 C-n 白さ 黒さ 赤さ 青さ 白み 黒み 赤み 青み
白め 黒め 赤め 青め

24 { (C) 色 } -n 黄色み

25 { (β) C } -n 真っ白け 真っ黒け

名詞接尾語「さ」「み」「め」は形容詞語幹に付くため、「白」「黒」「赤」「青」および「黄色」(ただし、「み」のみ)に接するだけである。25の「け」真っ白なさまを強調する意の接尾語である。

■ 複合語

1 (C) 色 白色 黒色 赤色 緑色 青色 紫色 紅色^{くれない} 黄色 藍色
* 茶色 * 紺色 * ピンク色 * ベージュ色

「黄色」「藍色」は普通「色」を付けて用いられるが、他は「色」がなくても用いられる。

2 (N) 色

〈Nが1字で1語の場合〉 灰色 橙色 鼠色 空色 卵色 茜色 桜色
桃色 水色 肌色 莓色 柿色 墨色 * 金色 * 銀色 * 朱色

〈Nが2字で1語の場合〉

薔薇色 小豆色 菖蒲色^{あやめ} 芥子色^{けし} * 象牙色 * 珊瑚色 * 煉瓦色 * 葡萄色 * 駱駝色^{こはく} * 琥珀色 * 瑠璃色 * 蜜柑色 * 桔梗色

〈Nが3字以上で1語の場合〉

* レモン色 * セピア色 * オレンジ色 * オリーブ色 * クリーム色

Nはある色を帯びている事物で、「Nのような色」という意味で色彩語となる。このうち、漢語の「金」「銀」「朱」およびオレンジは「色」を付けなくても用いられる。それは、「金」「銀」は金属名として日常的によく対で用いられ、色彩名としても「金色」は「こがね(黄金色)」よりも現代的な感じがするからであり、また、「朱」も朱墨として書道などで親しまれていて、それらはその事物を指すというよりも、特定の色を表す場合がほとんどであるから、一字漢語としてよく用いられるのであろう。また、「オレンジ」は果物の名称である。その色は赤と黄の中間色という基本的なものであるが、和語・漢語に適当な語がなかった。そのため、「色」を付けなくても用いられるというように、基礎色彩語として定着したのであろう。このほか、Nの中に色彩語が含まれるものもある。

赤銅色 黄土色 青磁色 紅梅色

3 ([N1の] N2) 色 菜の花色

4 ([N1] N2) 色 檜皮色

5 ([α] N) 色 若草色 若竹色 若葉色 薄墨色

6 ([β] N) 色 小麦色

「黄金色」は、コを接頭語とすれば、ここに分類される。3~6は「Nのような色」の意である。

7 (N) C 江戸紫 * 古代紫 唐紅 海老茶 ※スカイブルー

※マリンブルー ※ワインレッド ※エメラルドグリーン ※サーモンピンク

「江戸紫」「古代紫」「唐紅」は「Nで用いられたC」の意であり、それ以外は「Nのよ

うなC」の意である。これらは「色」が付かない。

8 ([V]C) 色 焦茶色 萌黄色

Vは動詞連用形である。これらは「色」が付かなくても用いられる。

9 [C][C] 白黒

「白」と「黒」は「白黒写真」「白黒テレビ」「白黒映画」のように明暗の対比を表すほか、「白黒をはっきりさせる」のように〈正と邪〉の意を表すこともあり、また「目を白黒させる」のように用いることもある。

10 CC 黄緑 青緑 赤紫

隣り合わせの色相を表す語を重ねたもので、その二色の中間色を表す。これらは「色」を付けないことが多い。

11 (C) { [c] 色 } ☆茶褐色

「Cがかったc色」の意を表している。これらは「色」が必ず付く。「茶」「褐色」ともに自立形式であるため、複合語としておく。

N その他

最後に、漢語の、いずれも非自立形式の造語成分からなるものをあげる。

1 (C) 色s ☆褐色 ☆白色 ☆黒色 ☆赤色 ☆黄色

色彩語の1字漢語に「色」が付いた語で、自立形式であるものは少ない。それだけで「褐色の服」のように自立して用いられるのは「褐色」ぐらいである。「白色」「黒色」「赤色」「黄色」は、「白色光」「黒色火薬」「赤色革命」「黄色人種」などのように漢語の構成要素として用いられるもので、語の構成上では修飾成分に過ぎない。和語に、色彩語としてよく用いられる「しろ(いろ)」「くろ(いろ)」などという語があることから、漢語形はあまり用いられないのであろう。これに対して、「褐色」は〈黒っぽい茶色〉の意であるが、これに相当する和語の単純語がないため、自立して用いられるように思われる。また、基礎色彩語である「緑」「青」に「色」を付けて漢語でリョクショク、セイショクなどと言うことがないことは注目される。「青色」の場合、「あおいろ」(青色申告)というように和語の語形で用いるのは、あるいはセイショクという音読は同音語が多いために嫌ったためであろう(注6)。

2 (k) c *漆黒

これは「kのようなc」の意を表す。

3 [c][c] ☆紅白 ☆黒白

「紅白」は「紅白の垂れ幕」のように2つの色名の組み合わせを表すほか、「紅白歌合戦」のように2組に分けたそれぞれを指すこともある。「黒白」は「黒白を明らかにする」「黒白を弁せず」のように、〈白と黒〉の意のほか、相違が明白にわかるものの意にも用いられる。